

処女シスターの私が、元同級生の関西弁ヤクザくんに

「神様から奪い返したろ」とあまあま♡丁寧

抱かれちゃうお話

ゝ初恋こじらせヤクザの溺愛執着セックスゝ

プロローグ

第一章 極道と修道

第二章 快楽と背徳

第三章 愛情と劣情

第四章 依存と執着

第五章 あなたとわたし

エピローグ

プロローグ

「俺の名前、紫苑って言っくんやけどな」

中学三年生、秋。

文化祭の準備期間のことだった。

三ヶ月前に転校してきた上条紫苑くんは、背が高く、髪の毛に少し癖があるつり目の美形さんだった。あと耳にはいくつかピアスが付いていて、初日から腰パンで、学ランからシャツも出ている。

そんな彼と向き合って話をするのは、その時が初めてだった。少し緊張していたのを覚えている。

紫苑くんは、のらりくらりとした口調で言葉を続けた。

「なんやお寺さんに関係あるらしいやん？ オカンは響きと字面で決めた言うてたけど。どういう意味があるん？」

どうやら彼は、私がそこそこ大きいお寺の娘だと知っているらしかった。

しばらく使っていないなかった喉を少し鳴らし、どぎまぎしながら声を出す。

「あ、ええつと……紫苑っていうお花があるんだけど、仏花としてよく使われて……」

「ぶっか？」

「仏のお花って書く……お供えのお花」

「縁起悪」

彼の反応に、咄嗟に「しまった」と思った。自分の名前の由来がお供物のお花なんて、人によつてはいい気分ではないだろう。

慌てて、付け加える。

「で、でもすごく綺麗だから。薄紫で、真ん中に可愛い黄色があつ

て」

「……ほーん」

「あ、あの、漢字は違うけど、『しおん』っていう教えもあるんだよ。『親や師があつて私たちは生きてるんですよ』『恩を忘れないようにしましう』つて……」

昔父親から言い聞かせられた言葉を披露すれば、彼は笑った。

嬉しいとか楽しいとか、そういう気持ちは微塵もこもっていない、ひどく乾いた笑みだった。

「ハッ、最悪や」

私の初恋は、多分そこから始まったんだと思う。

第一章 極道と修道

そんな甘酸っぱい記憶を思い出したのは、壁の向こうに、今まさに彼がいる気がするからだった。

気がするというのは、ここが教会の懺悔室であり、壁を一枚隔っているためである。

でも、第一声の「どーも。神父様？」で鮮明に中学時代が蘇ってしまったから否定のしようがない。その後、平静を装って「いえ、シスターです。こんにちは」と答えたけれど、果たして私は平静を装えていただろうか。

「懺悔室っちゅーのは、シスター様が話聞いてくれるん？」

「いえ、本来は神父様がお受けする場です。うちの教会は週末にしか神父様が見えられないので、平日はお話を伺う部屋として開けていま

す。そのため、秘跡は授けられませんが……」

「ひせき？」

「神の御言葉をお伝えし、ゆるしを与えることです」

「……ほーん」

ああ、紫苑くんだ。

記憶の中の彼とぴったり一致した声に、心臓が熱くなった気がした。

放課後の教室、二つの机、紙で作ったたくさんの花。

一つの記憶にいろんな記憶がくつついて、ぶわっと私を襲ってくる。

ため息をつきそうになる感傷に何とか耐えて、シスターの顔を続けた。

「力不足で申し訳ありません。……でも、お話を伺うことならできま

す。誰かにお話を聞いてもらうだけで、心が軽くなることもありますから。よければ、お聞かせください」

（大丈夫。きっと彼は気づいていない。私は気づかないふりをしないとけない。ここは、そういう場所だから。私は、シスターだから）
自分に暗示をかけるように心の中で唱えながら、胸にあるロザリオを握った。ひんやりした感触に、少しだけ呼吸が落ち着く。

「ま、誰でもええわ。別に許してほしいわけちゃうし。気まぐれで来ただけやから」

「気まぐれ……ですか」

「そお。神も仏も、髪の毛一本分も信じとらんもんで」

「……」

教会の懺悔室で、そう言い切ってしまうのが紫苑くんらしいと思った。中学時代、私が「シスターになりたいと思ってる」と溢したとき

も「仏さんも救ってくれへんのに？」と言っていたのを思い出す。

（笑ったなあ、あの時）

一人静かに思い出に浸っていると、紫苑くんは続けた。

「せやけど——まあ、たまにな。いまの道やないところにおったんかなあ、とか考える時があつて。今日はそれ」

「……いまの道、とは？」

「極みの道」

「きわみ……？」

「極道」

「……！」

そういう噂は、確かに聞いたことがあった。お母さんが「あの子のお母さんが『ああいう人』だからね」と付け加えていたのだって、鮮明に覚えている。紫苑くんのお母さんはシングルマザーで、いつも違

う男性を連れて街を歩いていた。

(うちのお父さんだって、似たようなものののに)

何かがめらりと蘇る。重たい感情を飲み込みたい私と裏腹に、紫苑くんは軽い口調のままだった。

「びっくりした？」

「……少し」

「シスターには縁遠いわな」

「でも、その……他の道を、考えることが？」

きつとシスターとしては、こんな踏み込んだ質問は褒められたものではないだろう。でも、聞かずにはいられなかった。

紫苑くんは、やっぱり軽い口調だ。

「考えるだけや。遅かれ早かれ、しぜーんとこつちに行つとつたやろうしな。骨の形からして向いとるんちゃう？」

諦念が混じったような口ぶりも、昔と変わらなかった。

どこか達観した視点で話してくれるのが、当時の私にとって心地が良かったのだ。

だから、幸せになつてほしかった。

今の彼が幸せでないと決めつけるのはもちろん失礼な話だけれど、その道が険しく、容易でないのは世間知らずの私でも分かっている。

（私は、彼に何もできない）

じつとりとした絶望感に言葉が出ずにいると、彼は言った。

「今朝な、同級生が夢に出てきてん。中学生のころの。で、たまたま教会が目え入って」

「……」

（耐えなきや）

こんな、個人的で甘美で切ない気持ちはこの場に相応しくない。

そうは分かっている、瞳の潤みを止められなかった。どうしても、嬉しかったのだ。

（覚えててくれる）

私にとって大事だった思い出が、彼の中にもきちんが残っている。

シスターとしてこの身を神に捧げていても、その喜びは私の身体中を目一杯駆け回っていた。

「その子、この時代にシスター目指す言う変わった子おでな。……ちなみにシスターは、いつから目指してたん？」

そう問われて、気づかれないように息を吸う。小さく吐いて、ゆっくり答えた。

「私も、同じくらいの年頃でした。近所の教会にいらしたシスターに可愛がってもらって、そこから憧れて……」

浮気性の父親と、外面ばかり気にする母親。

仏様は、私の家を救ってはくださらなかった。だから、神様に縋ってしまっただろうか。

最初は教会に居場所ができたことが嬉しかったただけなのに、次第にここに仕えることが自分の使命だと思ふようになったのだ。

(おかげで、ほぼ勘当扱いだけど……)

「実家、寺やのになあ。後継ぎとか困ってはるんちやう？ お父さん九代目やったつけ、香乃ちゃん」

「七代目です。後継はお兄ちゃんが……え？ ……え??」

流れるような問いに、流れるように答えてしまつて固まつた。紫苑くんがすぐに「ああ、せやつたせやつた」と笑う。

もしかして、彼もまた最初から。

「クソ真面目な兄貴おつたもんな、光本家」

「しっ、紫苑くん……!」

（気づかれてた……！）

気づいてないふりをして会話していたのが急に恥ずかしくなった。

紫苑くんは壁の向こうで「こんなことあるんやなあ。正夢やん」と楽しそうに言っている。

「いつから気づいて……!?」

「最初っから。気づかんわけないやん。んで、香乃ちゃんも気づいてるのにも気づいとった」

「えっ」

「でも惚けてんのが可愛かったし、泳がせてみよ思て」

「も、もう……っ！」

可愛いと言われ、さらに顔が熱くなる。昔から大人びた余裕がある人だったけれど、明らかに『女性の扱い』というスキルが加わってしまっている。

（壁があつて良かった……！）

「香乃ちゃん、ほんまにシスターになれたんやな」

「う、うん……」

「おめでとう」

「……ありがとう」

紫苑くんは、神も仏も信じていない。けれど、心からそう言つてくれていた。

いつかの恋心が疼いている。当時は気づいていなかったけれど、私はこうやってきちんと「私」を見ていてくれる彼のことが好きだつたんだと思う。

「俺は立派にヤクザやつとるで。正反对やな。昔っからやけど」

「……」

「そんな顔しなや。ぼちぼちやつとるし」

「か、顔って……見えてないのに」

「香乃ちゃん分つつっかりやすいで、昔から」

「うう……」

自覚はある。実際、紫苑くんにからかわれたことは少なくなかった。

「結婚は？」

「結婚？ えっと、私はシスターだから」

「でさんの？ ほな、彼氏もおらん？」

「うん。シスターになるって、そういうことだから」

「ほんまにいい？ 指、見してみ」

「え？」

「左手。薬指」

「ほ、本当だよっ」

「ほんなら、見せれるやろ？」

胸の高さにある小さな格子窓の向こうから「ほれ」と紫苑くんの指が出てくる。大きな手だった。

「……」

昔から、どこか強引なところがある人だ。

（いつも流されてたなあ）

小さな懐かしさに動かされるように、紫苑くんの手を取った。
すると、すぐに笑われる。

「ちいっさ」

紫苑くんの手は、暖かくて、乾燥していて、重そうだった。男性の手にこんな風に触れたのは初めてで、自分から手を置いたのに後悔するくらいドキドキしている。

（心臓破裂しそう……）

紫苑くんは、私の指を掴むと「どれどれ」と引っ張って壁の向こうに連れて行った。

「ん、良かった」

紫苑くんは指を握られて、まじまじ見られて、意味深な言葉を投げられている。

心臓がバクバクうるさくて、密かに息を呑んだ。けれど、紫苑くんには全部が筒抜けだ。

「香乃ちゃん、緊張しすぎやろ」

「な、なんで……っ」

「君、分かりやすすぎるねんて」

「だって……!!」

「そんな可愛い反応されたら、虐めたくなるやんな」

「えっ」

ぱくっ

何が起こったか一瞬分からなかった。でもその一瞬を超えると、一瞬で状況が分かかってしまつて頭が沸騰する。

(指、食べられてる！)

「な……っ!?」

「なんこの指、かわいらしいなあ」

「し、紫苑くんっ」

ぬるり♡

生暖かい舌が、薬指に絡みつく。紫苑くんの口内は、私の指に吸い付くように狭くなつていた。口に入れられた指は固い歯で優しく固定され、紫苑くんの舌でくちゅ……♡くちゅ……♡としやぶられる。表現できない感覚に、肩がピクツと震えた。

(なんか、変な感じ……っ♡)

「んッ……♡」

「あら、ええ声」

「ッ……！」

からかわれるように言われて、慌てて口元に手をやった。どうにか逃げようとしたけれど、紫苑くんの力が強くて敵わない。

「なんで、こんなこと……っ」

「なんでやる？ 触つてもうたら、なんやねぶつてみたあなつた」

ちゅぷっ……♡ ちゅぷっ……♡

紫苑くんの口は時折吐息を混ぜながら、私の指を味わっている。ただ舐めているだけなのに、官能的な音が懺悔室に響いていく。少しずつ、居場所がなくなっていくような気持ちになった。

「おいし」

「や、やめっ……！」

指以外どこも触られていないはずなのに、不思議と下半身がむずむずした。訳がわからない自分の身体の反応に混乱して、思わず声が震えてしまう。

「紫苑、くん……ッ」

「ん。ごめんな、泣かんというて」

ちゅっ♡とキスを落としたような音をさせる紫苑くんは、私が泣いてしまう寸前に手を離してくれた。素早く引つ込めて、胸の辺りでぎゅうつと握る。

「香乃ちゃん」

「ッ」

かっちりと壁に阻まれているのに、すぐ近くに彼がいるような気配がした。それくらい彼の声は狭い懺悔室によく響いて、私の心臓を怖いくらいに驚掴む。

「会えて良かったわ。また来るな」

優しい声でそう言った彼は、ぎし、ぎし、と足音を響かせながら懺悔室から出ていった。

小さくなっていく足音に反して、私の心臓はドキドキ、ドキドキと音量を下げてくれない。吐く息が、震えてしまっていた。

湿った薬指に目を向ける。指を曲げて、恐る恐るペロリと舐めてみる。人間らしい味を知覚した瞬間、すぐに血の気が引いた。

（私は、なんてことを……！）

自分の立場を思い出し、慌てて水道へ向かった。

誰にも見られたくない一心だったけど、よくよく考えてみれば見られたところで私は『手を洗っている人』でしかない。それでも、私は必死になって薬指を洗い流した。

「……っ」

どれだけ洗い流しても、何かが落ちていない気がする。
心臓が、ずうつとうるさかった。



中学三年生の文化祭準備で、私たちは教室に飾る紙の花を作らされていた。

素行の悪い関西弁の転校生と、大きなお寺の世間知らずのお嬢様。
自然とクラスメイトの輪からあぶれていた私たちに割り当てるには、うってつけの作業だったのだろう。

みんなが廊下や美術室で作業をしている中、私たちは置いて行かれ

たように黙々と紙を折ってはホッチキスで留め、それを開いてはお花を量産していた。

「……」

「……」

気まづいなんでものじゃない。見るからに素行が悪い紫苑くんのことが、少し怖くもあつたのだ。

「えっ」

でも、彼の手元を見てしまった私は、思わずそんな間抜けな声を漏らしていた。

鋭い目が、私の方を向く。

「なん？」

「ご、ごめん。上条くん、作るの早いね……」

「……言うほどやろ」

紫苑くんはそう言ったけれど、目の前にある彼の机の上には私の倍量のお花が咲いていた。途端に申し訳なさが溢れてきて、謝罪の言葉が口から出る。

「ごめんなさい……私、遅くて……」

「光本さんは綺麗にやつとるやん」

「……」

（名前、知ってたんだ……）

当然のように知らないと思っていたから、正直驚いてしまった。

しかも、私の謝罪にフォローまでしてくれるのだ。申し訳なさが更に募っていく。

（……失礼だったな）

シスターたちの顔を思い出す。

いつだって平等で、寛大で、優しさに溢れている彼女たちのように

なりたい。私はいつも、そう十字架に祈ってるじゃないか。

緩和された緊張のおかげで、笑顔は自然と出てくれた。

「上条くんの方が綺麗だよ。器用なんだね」

そうして目が合うと、紫苑くんは唐突に言ったのだ。

「……俺の名前、紫苑って言うんやけどな」

私は、今でもあの瞬間を何度も思い出す。「香乃ちゃん」と呼んでくれるのは、同級生の中で紫苑くんだけだった。

「光本さんは『香乃』やったつけ。名前」

「う、うん」

「前住んでた家の隣のバーちゃんと一緒や」

「えっ」

「字いも一緒。香乃ちゃんって呼んだら怒るねん。クソガキいうて」

「く、クソガキ……」

「君のことも、香乃ちゃん呼んだろ」

「ええっ」

急な提案に戸惑うと、彼は笑った。

鈍臭い私とは違って、喋りながらも綺麗な折り目を作っては、綺麗なお花を咲かせている。

「俺のことも、紫苑でええよ」

しばらくの間は「上条くん」としか呼べなくて、その度に「紫苑」と言い返された。「紫苑くん」が口に馴染んできた頃、彼はまた転校して行った。

その時のことも、私は何度も思い出す。

美しい後悔のような形をしている。何を上に被せてしまおうが、今でも私の中で燻っていた。



「香乃ちゃん、何食べたい？」

懺悔室で再会した数日後、私は紫苑くんの車に乗っていた。

何があったかと言えば、退勤時間に教会の前でクラクションを鳴らされ「今の時代は便利やなあ、ちょこつと調べたら香乃ちゃんの職場のことなーんでも教えてくれるねんで。この前のお詫びしたいし、ご飯行かん？」と紫苑くんに誘われたのだ。

もちろん断ろうとした。けれど、すぐに「そのコンビニで待つとるから、着替えてき。来てくれへんかったら、サンガラスかけたスーツのイカつい男が、教会の前で黒塗りのセダンつけていつまでも居

座ることになってまうで」とニコニコ言われて、選択肢がなくなってしまうたのだった。

（昔と変わらない強引さ……）

だから、恐怖という感情はあまりなかった。むしろ懐かしさだらけで、助手席に座っても大して緊張もできない。

「私はなんでも……」

「お詫びなんやから香乃ちゃんが決めてや。寿司？　焼肉？　鰻？　中華もええな」

「……じゃあ、中華で」

「いや、それ俺に合わせたやろ？　あかん、考え直し」
「ええっと……！」

的確に見抜かれて、頭をフル回転させる。でも、どれに対しても順位がつけられなかった。

（どれでもいいのに……！　本当に紫苑くんが食べたいのでいいのに……！）

固まってしまった私に、紫苑くんは笑った。

「早よ決めな、コンビニになつてまうで」

「わ、私はそれでも……」

コンビニなら、お金もそんなにかからない。紫苑くんの口ぶりからすると、なんだかすごく高いところに連れていかれそうだから逆にそっちの方がいいかもしれないと思つた。

「お、香乃ちゃんついにコンビニデビューしたん？」

「さすがにもうしたよ……よく覚えてるね」

「衝撃やったわ、あれ。平成生まれでコンビニ行つたことないて。

まあでも、コンビニ飯食う香乃ちゃんは想像つかへんなあ」

「た、たまにおにぎりとかパンとか買うよ」

「ほな、おでんも？　肉まんも？　なんたらチキンも？」

「それは……その、注文の仕方が分からなくて……」

本当にどこまで彼は私のことを見抜いているのだろうか。

どんだん小さくなる声で言ったら、紫苑くんは「はっはっはっ！」と大きな声で笑った。失礼すぎる。

「だ、だっていろんな種類があるし……！　店員さんもいつも忙しうだからご迷惑かけられないし……！」

「いやあ、香乃ちゃんほんつま最高やわ。優しいからなあ」

「そういうわけじゃ……」

「そんなら、今日はコンビニ飯でパーティーしよか？」

「えっ」

意外な提案に、少し声が弾んでしまった。

コンビニ飯でパーティー。

私の人生において、全く身近にない響きだった。

前を向いて運転している紫苑くんがまた笑う。私の表情が見えてい
るみたいだった。

「決まりやな。ほな、ドライブしよか」



想像していたよりも何倍も安全運転で車を走らせた紫苑くんは、と
あるサーブিসエリアで車を停めた。

広い駐車場にポツポツと車が置いてある。明るく灯る建物に吸い寄
せられているような配置が、なんだかとても不思議だった。

観光名所に訪れた時のような高揚感に「わあ」と思わず声が漏れると、紫苑くんは言う。

「こういうところも、あんま来おへんやろ？」

紫苑くんらしい優しさだと思った。いつも飄々としているけれど、こうやって私のことをよく見ていてくれて、考えてくれる。だからこそ、こんな選択ができるのだ。

中学の頃と同じだ。素行が悪くても、ヤクザでも、紫苑くんは紫苑くんだと思った。

「ありがとう。テレビで見たことはあるんだけど、来たのは初めて。

私の家、旅行とかもあんまりできなかったから……」

「せやろなあ」

「不思議な雰囲気だね。なんかワクワクする」

「そないに喜ばれてもうたら、いろんなところ連れて行きたなるわ。お

上手やね」

さらりと吐かれた言葉に、頬はしつかりと赤くなった。暗いからバレていないと思いたい。

紫苑くんは車のドアを開けると「風つよ」と呟いた。同じようにドアを開ければ、確かに強かったから目を細めてしまう。

「香乃ちゃん、飛ばされんようにな」

「バ、バカにしてる」

「してへんよ。スカート、気いつけや」

二人して俯き、そんな会話をしながら建物の中に入った。

フードコートを見ると、かなり席が空いていた。それを見た紫苑くんが「こっちにする？」と聞いてくれたけれど、無数にあるメニューから、これぞというものを私が決められるはずもない。

結局、建物の端にあるコンビニに行き、紫苑くんの後ろにくつつき

ながらご飯を買った。

ちなみにおでんは、忙しくても声をかけていいらしい。そういうものだと理解はできたけれど、一人でできるかと問われれば難しい。今日が最初で最後のコンビニおでんだと思った。

「車で食べよか」

「うん」

「真横通られたら落ち着かんし、ちょお移動させるわ」

そう言って駐車場の端の方に車を停めなおした紫苑くんは「後ろの方が広いしな」と後部座席に移動する。言われるがままについて行き、買ったものを二人で広げていった。

おでん、肉まん、なんとらチキン。

「ピクニックみたいやな。したことないけど」

若干笑えない軽口を言い、紫苑くんは「いただきます」と手を合わ

せる。私も同じように「いただきます」と呟いた。

「何食べたい？」

私の方に身体を向けて、彼が笑う。

何度も何度も、中学時代の私たちが蘇った。



ご飯を食べながら、いろんな話をした。外では、相変わらず嵐のような風がごおごおとうるさい。

お互いのことを少しずつ話すと、自然と話題は重くなっていった。歳を取ったからか、昔より何倍も話しやすかった。

「……で、やっぱりシスターになりたいって言ったら、お母さんにすごく怒られて」

「そらあ、大事な跡取りが独身貫く言うたらなあ。しかも異教やし」
「ははは……」

まさにその通りだったから曖昧に笑って、おでんの出汁を飲む。

頭の中で「シスターになるなんて、私が周りからなんて思われるか」というお母さんの声がする。親不孝なのは分かっていたから勝手に気まづくなってしまうって、埋めるようにおでんの出汁を何度も飲んだ。

「んで、お兄さんが継いだん？」

「うん。『逃げていいよ』って、言ってくれて……」

やっぱり気まづい。

私は、お兄ちゃんを犠牲にして自分の進路を決めたのだ。静かに、

出汁を啜る。

私の気まずさに紫苑くんが気づいているかは分からない。

ただ、ひたすらに素直な声ではあった。

「逃げえ？ 家から？ そんなみんなそうやろ。いつか逃げんと、一生絡め取られるだけや」

『絡め取られる』という表現がとてもぴったりで、鳥肌が立って、出汁を飲み干した胃が完全に温かくなると、なぜか涙が滲んだ。安心感に近い、じんわりとした嬉しさだった。

「うん……」

「え？ は？ 何？ なんぞ？」

声が震えてしまい、気づいた紫苑くんは焦ったように言う。

「ちょおちよお待ち、香乃ちゃん、なんで泣いて……ほらティッシュ」

車の収納からティッシュを出した彼は、珍しく慌てた様子だったから笑ってしまった。ティッシュをありがたく受け取り、目頭を抑える。

「ごめん。そんな風に言ってもらえるなんて、思ってたなくて」

「君は昔から何も言わんから。黙ってたって誰も助けてくれへんよ。」

そういう時は叫び

「叫ぶの？」

「せや。『みんな死ね』って」

「ふふ、言えないよ」

あまりにもストレートな文言に笑った。

すっかり涙が乾いてしまい、紫苑くんを見上げる。すると、彼は真顔になって私を見つめていたから心臓がぴよんと跳ねた。

中学の頃、私は彼と目が合うとよくこうやって心臓を跳ね上がらせて

いた。

（跳ね上がらせちゃいけないのに）

脳裏にある十字架に、懺悔をしなくなった。止まりそうもない心臓に耐えながら、紫苑くんに聞く。

「……どうしたの？」

「いやあ。可愛いなって」

何故か瞬時蘇ったのは、懺悔室でのことだった。

庇うように手をぎゅっと握る。けれど、紫苑くんは微笑みながら私の手を取った。

「……っ」

「真っ赤。かぁいい」

左手を握られ、親指ですりすり、と手の甲を撫でられる。くすぐったい仕草に、肩が少しだけ跳ねた。

「この前、急に舐めてごめんな？」

「だ、大丈夫……」

「ほんまは今日、我慢するつもりやってんけど」

「え……？」

紫苑くんが迫ってくると、空になったおでんの容器が下に落ちていった。身体を引いてみるけれど、背中がすぐ座席にくっついてしまつて逃げられない。

「し、紫苑くん……っ」

「もーあかんわ。香乃ちゃんに触りたい」

「んんっ……！」

押し付けられるようにキスをされる。もちろん初めてのキスだった。同じ唇なのに、紫苑くんの唇は私よりも柔らかいように思えたから、そこにだつて驚いてしまう。

「シスターって、神様に操立てとるらしいな？　香乃ちゃんもそんなやろ？」

「んっ……は……」

「ほんま腹立たしい、いつの間にか知らん男に寝取られてもうて。あん時、俺が先に唾つけとつたら良かったわ」

小さくちゅ、と音を出した紫苑くんは、一センチ遠いところで低く言う。

「神様から奪い返したろ」

ぬる♡と唇の隙間から、紫苑くんの舌が潜り込む。懺悔室で私の指を襲ってきた舌と全く同じ動きで、ちゅぷ♡ちゅぷ♡と舌を絡めてくる。

「ふ……ッあ♡　だ、だめ……っ♡」

「だめやろな。嫌われたないから、嫌ならちんこ蹴り上げて」

「そ、んなことっ……♡」

「蹴り上げんかったら、合意になってまうで？ ええのん？」

すり……っ♡ すり……っ♡

ニツトの中に入ってきた手が、優しく動かされる。ブラジャーの上から擦られているだけなのに、紫苑くんの親指は私の乳首の位置が分かっているみたいに動くから身体が勝手に震えてしまった。

「や……ッ、んっ……♡」

「こおんな若くて可愛い女の子独り占めっちゅーのは、神様もえげつない趣味したはるな？」

「ひあ……ッ♡」

「でも安心したわ。神様に操立てたところで、身体はちやあんと『女の子』や」

こしこし♡ こしこし♡

紫苑くんに擦られ続けた乳首は、熱を持って膨らんでしまっていた。硬くなっていくほど快感が強くなり、どうしても声が抑えきれない。彼は私の目を見据え、微笑みながら言った。

「乳首しつかり勃たせてもうて」

「~~~~ツ……♡」

ストレートにそう言われて、羞恥心で死にそうだった。前回よりも心臓がうるさくて、息だつて浅くなってしまう。

「ほ、ほんとにだめ……ツ♡ 紫苑くん……♡」

「香乃ちゃん」

「んむっ……♡」

硬くなってしまった乳首をすりすり♡と擦りながら、紫苑くんがまた唇を押し付けてくる。にゆる♡と入ってきた舌が、おぼつかない私の舌を弄ぶ。

「可愛い舌」

逃げてても逃げてても舌を掬われて、くちゅくちゅ♡くちゅくちゅ♡といやらしい音が車内に響いた。逃げようとする私の手首を、紫苑くんがぐいっと引つ張る。

「ん……ッ♡ ふっ……あ……ッ♡」

そうやって紫苑くんの指と舌に翻弄され続けていると、何かが手首に巻き付いた感覚がした。でもそう気づいた時にはもう遅く、気づけば私の両手首はガツチリと拘束されてしまっていた。

「あ……っ！」

「はい、出来上がり」

何がどうなってるかも分からない。紫苑くんのネクタイで結ばれている結び目は、驚くほど綺麗だった。器用なところまで昔と変わらないう紫苑くんは、にっこり笑った。

「取れへんやろ？ 職業柄、こういうの得意やねん」

本当に取れないし、力を入れても全くズレなかった。今更ながら恐怖を感じて、小さく首を振る。

「や、やめて……！」

「ヤクザとドライブすんのにスカートはあかんやろ、香乃ちゃん」

少しでも冷たい手のひらが、スカートに入ってくる。

「そらあ、手えも入れられる」

太ももをゆっくり撫でながら、紫苑くんの手の手ひらがやってくる。

むずむずするような、くすぐったいような感覚は徐々に上がってくる
と、やがて私のショーツに辿り着いた。

「だめ……ッ！」

頑張って閉じていた私の太ももの隙間から、紫苑くんの手が無理やり入ってくる。そして、ぴとっとクロツチに指を添えた。

「ちょーつとだけ、湿つとるな？」

「っ……!!」

指摘されなくなかったことをはつきり言われてしまい、ショックに近い気持ちだった。でも紫苑くんは気にもせず、濡れている箇所をクロツチの上からかしかし♡かしかし♡と中指の爪で引っ掻いてくる。

反応したくないのにピクッ♡ピクッ♡と身体が動いてしまつて、余計に恥ずかしくなってくる。

「しかし、理不尽やなあ。香乃ちゃんは真面目に純潔捧げとんに、それがヤクザに手え出されたところで神様はなあんもしてくれん。性根が腐つとるわ。そんな男やめとき」

にちにち♡ にちにち♡

同じところをずつと往復されて、クロツチの染みがどんどん広がつていく感覚がした。じとつと湿った感覚は、きつと私より紫苑くんの

方が鮮明に受け取っている。

「ちゃーんと濡れとる。お利口さん」

「んっ……、やあ……ッ♡」

「あー、香乃ちゃんのお顔たまらん。想像通りや」

吐息を熱くさせた紫苑くんが、ちゅ♡と軽いキスをしてくる。つつ
つ……と私の肌に手を這わせた彼は、ショーツのゴムに指を掛けた。

「こっちはどうやろ？」

「あ、だめ……！」

あつという間にショーツを剥ぎ取られ、捨てられる。いくら力を入れたところで紫苑くんに敵うはずもなく、「見して」と言う彼に強引に開脚をさせられた。

恥ずかしいを通り越したような羞恥心で、頭の中が真っ白になった。

「ん、想像通り。かーいらしいピンク色のおまんこ」

『おまんこ』という俗っぽい言葉に、さらに羞恥心が募った。その意味はもちろん知っているし、今まさに紫苑くんに見られている場所がそうであることも分かっている。

（でも、いやらしい言い方……っ）

とにかく、身近ではない言葉だ。だからか心臓が熱くなつて、反芻してはたまらないほど恥ずかしくなってしまう。

紫苑くんと私とでは、ステージが違いすぎると思った。だって、私がそうやってたった四文字の言葉に掻き乱さられている間にも、紫苑くんは私の太ももを抑えつけて、その『おまんこ』に顔を埋めるのだ。

「あッ……、やあッ♡」

れろおッ♡

味わうように舐められて、甲高い声が出る。舐められたのは、多分

クロツチを濡らした体液が出てくる場所より一段高い場所だと思う。
自分で触ったこともないところだった。

それをヌメついた舌で刺激されるとびつくりするほどの快感がやってきて、それと同じくらい「どうして」というびつくりにも襲われた。

（な、なんで声抑えきれないの……っ♡）

「クリも無垢な顔しとるわ。こんなところまで可愛いのも、なんなん？」

「あッ♡　だ、だめっ♡　ん、紫苑くんっ♡　き、汚いから……ッああ♡」

ちろっ……♡　ちろっ……♡

傷つけないように、傷つけないようにとするような優しい舌が、熱い息と共に『クリ』を襲ってくる。紫苑くんのふわふわした髪の毛に

触れながら抵抗するけれど、やっぱり敵わなかった。

「汚い？ 純潔の乙女が汚いわけないやん、お汁も甘くてたまらんなわ」

「ひ、あッ♡」

「いっぱいお汁出してや」

ちゅぱっ♡　ちゅぱっ♡　ちゅぱっ♡　ちゅぱっ♡

硬くなってしまっているクリを、何度も吸割れる。こんなところがこんなに硬くなるなんてことすら知らなくて、吸われるたびに腰が反った。

（しかも、こんなに気持ちいいなんてっ♡　し、知らない♡　知らないし、知ったらダメなのにつ♡）

「そこらへんの女ならクンニなんかせんけどな。香乃ちゃんはトクベッ」

ちゅこちゅこ♡　ちゅこちゅこ♡

クリを吸っていた紫苑くんの口の角度が変わると、何かがナカにぬる♡と入ってきて、動き始めた。どう考えたって舌でしかないはずなのに、何でどうされているか全く分からない。でも、腰が跳ねるほど気持ち良かった。

「なッ♡　やだあつ、あつ……♡　な、何それえ……っ♡」

「んー？　舌。こんなにも初めてやんな？　気持ちええやろ？　腰動いてまうやろ？」

「ひあッ♡　あっ♡　だめえッ♡　紫苑くんっ、んうッ♡」

「たまらんなあ、ちんぽ破裂しそうや。……早よここ入りたい」

「あッ、んっ♡　ああッ♡　吸わないでえっ♡」

「でも、初めてやからな。ちゃんと解したろな」
つぶッ♡

合図もなしに入れられた指に、思わず「ひッ」と声が出る。クリを舌でくにくに♡と転がす紫苑くんは、優しく言い聞かせるように言っ
た。

「ゆうっくり。ゆうーっくりやから」

ずぶぶ……♡とゆっくり彼の指を飲み込んでいくと、感じたこと
がない圧迫感に殊更恐怖が募った。助けを求めるように彼の名前を呼
ぶ。

「し、紫苑くん……っ」

「怖いなあ、ごめんな」

優しくそう答えた彼は、優しく私にキスをした。だけど止まっては
くれなくて、ナカに入れた指を数センチ動かしてはぬちぬち♡ぬちぬ
ち♡と往復を繰り返す。

「あっ、やあ……ッ♡ んっ……♡」

「キッツ。入るやろか、これ」

「は……ッん♡　だ、だめ……ッ、あッ♡」

「まあ、入るまで解せばええ話か」

ぬちゅ♡　ぬちゅ♡　ぬちゅ♡　ぬちゅ♡

曲げて、伸ばす。曲げて、伸ばす。されていることは、それだけな気がする。なのに、私のナカは次第にその動きを快感として受け取っていた。お汁だってどんどん溢れてきて、紫苑くんの指を手伝ってしまっている。

「んッ♡　あ……っ、あ♡」

「声、甘くなってきたな」

「ッ、ちがッ……ッん♡」

「痛ない？　指、増やそか」

「だ、だめ……っ♡」

「だーめ」

楽しそうに言い返しながら、紫苑くんがまたキスをしてくる。舌を入れられてしまったてじろいでしたら、もう一本の指がナカに入ってきて「んんっ♡」と声が漏れた。これ以上何も入らないと思うくらいの圧迫感だ。

「はは、ギツチギチや」

「や、紫苑くん……ッ♡ う、動かさないで……♡」

「ん、ちよつとずつな」

分かってるようで分かってない返答をした彼は、二本の指をぬく……♡と奥まで入れていく。

「いッ、あ♡」

「痛い？」

痛みなのか快感なのか分からない刺激に少し顔を歪めると、紫苑く

んはすぐにそう聞いてくる。

優しい仕草に咄嗟に首を振ってしまおうと、紫苑くんは「浅いところからしよか」と指の先を入り口の近くまで持っていた。二本の指を揃えて、上の方を優しく擦る。

「あっ……、ああッ……♡♡」

ぞくぞく♡と、何かが駆け上がっていった。

鳥肌のような悪寒のような感覚は、『快感』でしかないんだろう。でも、さつきクリを舐められたときの快感とは違って、その動きは当たり前のように私の声を甘くさせるものだった。

「だめ♡♡ そこ、あ♡♡ あ、んん……♡♡」

「ここ、Gスポットって言うんやけど知っとる？」

「し、らな……♡♡」

「クリとおんなじくらい気持ちええやろ？ 腰カクカク♡ってしとる

もんな」

「っ♡」

ちゅこちゅこ♡　ちゅこちゅこ♡

浅いところを擦られると、紫苑くんの指と私のお汁でいやらしい音が鳴った。紫苑くんはわざとのようにその音を掻き鳴らし、私の太ももをグツと抑える。

「今クリ舐めたら、どんだけ気持ちええやろ？」

「やッ♡　だ、だめっ♡　ッひ、あ♡」

ちろちろちろッ♡　クリクリッ♡

ぢゅうッ♡　ぢゅううううッ♡♡

おまんこの音をぐちぐち♡と鳴らしながら、紫苑くんの口が私のクリを虐めた。舐められたり、転がされたり、吸われたり、いろんな刺激に襲われるたびに腰が跳ね上がる。

「あつ、んッ♡ やあッ♡ だめっ♡ だめえッ♡♡ ひあッ♡♡
しおんくんっ♡♡」

「なんっちゅう可愛い声出すねん。いっぱいしたろ」

「やあッ♡ あ、あ……ッ♡♡」

ぐちゅぐちゅ♡こりゅこりゅ♡と舌と指に責め立てられて、大きくなつた快感が破裂しそうだった。

何かがキてしまう。尿意に似た、何か。

近づく何かに焦り、紫苑くんの腕を掴んだ。

「だめっ♡ だめなの、ッあ、紫苑くんっ♡ 私、んッ……ひい♡
な、なんか……ああッ♡」

「イきそ？」

「わ、かんなっ……♡ あ、あッ♡ やめてっ、あッ♡ だ、だめだからあッ♡」

「なんか出てまう感じやろ？　なら我慢し。気持ちええのくるから」

「やだッ♡　やだあッ♡　あ、あ、あッ♡♡」

「あーっなんなんその声。はよイってや、ちんぽイライラして死にそうや」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこ♡♡

本当にイラついたような声を出す紫苑くんは、ぢゅるるる♡と私のクリを吸い上げながら、激しく指を動かした。

強い快感に同時に責められて、しようとも思っていないのに腰が勝手にぐーっと弓なりになっていく。

「あッ♡　だめっ、だめっ♡　あっ、あっ……くるっ……♡♡　キ
ちやうっ♡　ひいッ♡♡　ん、ひッ……ッッッ♡♡」

破裂した快感に飲まれて、気づけばビクビクッ♡♡と大きく腰を揺らしていた。何が起きたか分からない頭が、ぐるんぐると戸惑っ

ている。

(い、いまのは……っ♡)

息を荒くしながら混乱する私に、紫苑くんは無言でキスをした。舌がぬるん♡と入ってきて、すぐに思考が奪われる。

「ん……ふぁ……っ♡」

「早よ入りたい」

「ッ……♡」

欲望しか感じられない言葉に、顔が熱くなる。

私の首筋にちゅ、ちゅとキスを落としていく紫苑くんは、慣れた手つきで私のニットをたくし上げていった。瞬間、紫苑くんの指に何かがピンと引つかる。「ん？」とチェーンを掴んだ彼は、不思議そうに呟いた。

「何これ？ ネットクレス？」

いつも身につけてるロザリオだった。

十字を形どったそれを視認すると、紫苑くんはすぐに顔を歪めて笑う。

「ハッ、ええお守りやな。これ握って耐えたらええんちゃう？」

ぶつきらぼうに言い、私の鎖骨近くに投げ捨てる。

ブラジャーのホックをパチンと外した彼は、私の胸に顔を埋めると冷たい口調でこう言い放った。

「だーれも助けてくれんけどな」

「ひあッ♡」

ちろちろちろっ♡♡

紫苑くんの舌の先が乳首を遊び、指の先がGスポットをぐちゅぐちゅぐちゅ♡と擦ってくる。拘束された手首を上になげられてしまい、私は紫苑くんの愛撫を受け入れ続けるしかなかった。

「あッ♡ あッ、だめっ♡ ああッ♡♡」

「香乃ちゃんがどんだけおっきい声出そうが、どんだけ車が揺れてよ
うが、だーれもなーんも気にしてくれん。『風強いなあ』て、下向い
て歩くだけや。なあ？ 俺たちもそうやったもんな？」

ぬちぬちぬちぬちぬち♡♡

怒った口調でGスポットを責められ、腰がカクカク♡と揺れた。私
の乳首を唇で噛んだ紫苑くんは、ちゅぱっ♡と乳首を吸うと、まるで
監視するみたいに顔を上げ、じいっと私の目を見つめてくる。

「あッ、だめっ♡ だめ、紫苑くんッ♡♡」

「操立てた神様かて、助けてくれへん。どうすんの？ 香乃ちゃん。
このままやと俺に犯されてまうで？ だって俺、もう止まれへんし」

「あっ、あ、だめッ♡ イッチやうッ♡ や、あッ♡♡」

「頭ん中、香乃ちゃんだけやもん」

「ツ……♡　　〃〃〃ツツ♡♡」

ビクビクビクツ♡

薄い色素の瞳で真っ直ぐ見つめられ、Gスポットで溜められた快感を爆発させてしまう。

紫苑くんの指をきゆうツ♡と締め上げている最中に、紫苑くんの舌がまたやってくる。その隙を縫うように、もう一本の指が私のナカに侵入してきた。

「あ……ツ♡」

「思ったよりいけそうやな。三本目はあっさり入ったわ」

三本の指は、意外にもすぐに抜かれた。その代わり、紫苑くんの舌はしつこくしつこく私の舌を追ってくる。

「ふあ……っ♡　ん、ふ……ツ♡」

「香乃ちゃん、俺の触って」

縛られた手を掴まれて、紫苑くんのスラックスに当てられる。

「！」

そこにあつたのは、硬くて大きな『モノ』だった。

同じ人間ものとは思えない質感と大きさに、息が浅くなる。こんなものが、体内に入るわけがない。

「分かりやすく怯えんでもええやん」

私の表情を見た紫苑くんは軽く笑って、また私にキスをした。くちゅ♡くちゅ♡と唾液を貪りながら、彼は言う。息が、どんどん苦しくなる。

「はあ……、ッ♡ んう♡」

「今からこれを香乃ちゃんの中に入れたるな？ そうなつたらもう、神様に立てるもんがなくなつてまうなあ？」

「や、やめて……紫苑くん……！」

「言うたやん。嫌なら、ちんこ蹴り上げえ」

金属同士がぶつかる音がする。ベルトが外され、ジッパーが降ろされ、見たこともない臓器がぼろんと出てくる。生命の危機のようなものを感じ、背筋が凍った。

「だ、だめ……」

「ゆうっくり」

また言い聞かせるように言った紫苑くんは、私の腰を力強く引き寄せた。紫苑くんが自分のモノを掴む。常に上を向くほど力を持った臓器が、私のおまんこに向けられた。

「だ、だってこんなの入らない……!」

「みーんな入つとるんやから。指三本いけたらちんぽだつて入るわ。

ちよつと痛いかもしれんけど、それは堪忍してや」

「やめて、本当に……! 紫苑くん、私、シスターだから……おね

がっ……、あっ♡」

反り立ったおちんぽが、ぬりゅ♡と私におまんこを掠める。

紫苑くんは笑っていなかった。怒っているような真剣な顔で、私を睨んでいる。

「俺にとつては、香乃ちゃんは香乃ちゃんでしかないわ」

ずぷうつ♡♡

指とは比較にならないくらいの圧迫感だった。

硬い先っぽを飲み込むと、もっと硬いところがめりめり♡と音が立てるように入り込んでくる。傷をつけられているような感覚に、悲鳴のような声が出た。

「ひ……ッ」

「痛いな？ ごめんな、力抜いて」

優しい声をした紫苑くんが、私の唇を甘く噛むようにキスをした。

気をそらせるためか乳首もくりくり♡と弄られて、その快感に溺れている隙におちんぼがどんどんどん埋め込まれる。

「あ……ッ、んんっ……♡」

「香乃ちゃん、ちんぼっか集中したらあかん」

「んうッ♡　ッ……ふっ……は……っ♡」

「いっぱいちゅーしよ」

私も紫苑くんもハアハアと息を荒くして、くちゅ♡くちゅ♡と音を鳴らしながらキスをした。

湿った車の中に反して、外では乾いた風がまだごおごおとうるさい。

「あ………」

「はあッ……♡　んんっ……♡」

「分かる？　香乃ちゃん。ぜえんぶ入ったで」

言われて目を向けると、確かに私のおまんこは紫苑くんをしつかりと飲み込んでいた。自分と紫苑くんの性器が一緒になってしまっているのも不思議な光景だったけれど、正直それどころではない。

内臓を上へ上へ押されているようで、うまく息ができなかった。

短い呼吸をする私に、紫苑くんも苦しそうな顔をしながら「待ってな」と額にキスをする。

「氣い抜いたら出そうや」

男の人の体の仕組みには、詳しくない。ただ、紫苑くんが苦しそうな顔をしているのは「氣持ちいいから」だということは何となく分かった。

だからと言って、私の余裕が生まれるわけでもない。

「は……ッ♡　っ……♡」

「香乃ちゃん、まだ動かんから。落ち着き」

力が抜けなくて、ずっと拳を握りしめてしまっていた。紫苑くんはそんな私の手を取ると、甲にちゅつとキスを落とす。

縛ってきているのも犯してきているのも彼なのに、勝手に膣が狭くなったから単純な自分が恥ずかしくなった。

苦しそうな顔の紫苑くんが笑う。

「こんなんがええの？」

「……！」

自分でも分らない。

犯されたのに。シスターなのに。

「いっぱいしたるよ。どこでもチュウしたる」

私の手を握る紫苑くんは、言いながら私の腕や、額や、頬、首筋、いろんなところにキスを落としていった。

「神様は、こんなんしてくれへんもんな？」

「っ……」

バカにするように笑うけれど、仕草だけとはにかく優しいから困ってしまふ。

愛情しかないと言っても言うようなキスを何度も繰り返す紫苑くんは、親指で乳首をくにくに♡といじり、時折ナカのおちんぽをピク♡ピク♡と揺らした。

「あーあかん、めっちゃ幸せ」

もう、感情がめちやくちやだ。

どうしたらいいか分からない。分からないけれど、私の膣は勝手に紫苑くんを締めてしまつて、締まりを直に感じてしまっている紫苑くんは笑つた。

「香乃ちゃんも？ うれし」

何回目かも分からないキスをされ、すぐに紫苑くんが「ちよつと動

くで？」と言う。

「や……っ」

「大丈夫やから」

ぬちゅ……っ♡ ぬちゅ……っ♡

とても小さな動きだった。本当に揺れているだけに感じる。なのに、大きなモノがナカで動いているだけで勝手に声が出てしまった。

「あっ♡ あ♡」

「かわい」

止めたくても止められない私の声を奪うみたいに、紫苑くんがキスをする。

「ちよつとずつな」

ずち……ッ♡ ずち……ッ♡ ずち……ッ♡ ずち……ッ♡

宣言通りに少し腰の揺れを大きくさせた彼に、また一つ「あッ♡」とトーンが上がってしまう。

膣壁を擦っていただけのおちんぼが奥にこつつ♡と当たると、さつきよりも強い快感が走っていくからどうしても怖くなった。

「あ……ッあ♡ だめ……ッ♡ ん、だめえっ……♡」

「はあ……っはあ……」

紫苑くんは、ずっと苦しそうな顔をしていた。

それでも私のおまんこに押し付けられる紫苑くんの腰は、滑らかな動きを一心不乱に続ける。徐々に、徐々にそのスピードが上がっていった。

「あッ♡ あん……っ♡ はっ……ああッ♡」

「良おなってきた?」

「や……っ♡ だ、だめ……っなの、ほんとに……あっ♡」

「ダメやなあ？　俺もダメや。すぐイキそ」

ぬちゅッ♡　ぬちゅッ♡　ぬちゅッ♡　ぬちゅッ♡　ぬちゅッ♡

私のナカに、余白なんて少しもない。

みちみち♡と入ってくるおちんぼは、ナカの壁やお汁と絡み合って恥ずかしくなるほどの音を鳴らしていた。紫苑くんが動くたびに紫苑くんの車もギッ、ギッと音を立ててるけれど、外の風に相殺されて消えていく。

そんなわけがないのに、誰にも見つからない場所にいるような気がした。

「んっ♡　あッ、はあ……っ♡」

「香乃ちゃん」

おちんぼが与えてくる快感に息も絶え絶えで、余裕のない私に紫苑くんはまたキスをした。

柔らかな舌に慰められると、ナカの快感は熱を保ったまま徐々に上へ上へとのぼってくる。ぱちゅっ♡ぱちゅっ♡と湿った音が大きくなるにつれて、私の声も次第に大きくなった。抑えたくても、抑えられない。

「あっ♡ 紫苑くん♡♡ んあッ♡♡ だめ、だめえ……ッ♡」

「香乃ちゃん……生理いつ？」

質問の意図は、もちろんすぐに分かった。

私は、学生時代から生理痛がひどくてピルを服用している。

でもそれを、今の紫苑くんに知られるわけにはいかない。その後に何をされるかなんて、分かりきったことだったろう。快楽に溺れながらも、そんなことはきちんと判断ができた。

「だ、だめッ♡ あっ♡ ぜ、絶対っ……♡」

「な、いつ？ 言わんと出すで」

「ッッ♡」

何も言えなかったから、ただただ首を振る。

どう答えたらいいか分からなかった。ピルを飲んでいるから、妊娠の心配はない。だからと言ってナカに出されることを良しとしてしまつていいはずもない。

(でも、もう奪われちゃったのに……ッ♡)

そうやって私が知識や理性や快感に振り回されていると、腰を打ち付けながら私を見下ろす紫苑くんは「あーなるほど」と何かに気づいたように呟いた。

「もしかして、ピル飲んでる?」

「っ♡」

「図星や。分かりやす。香乃ちゃん、嘘つくん苦手やもんな」

「だめっ、紫苑くんッ♡ ほ、ほんとに、あッ、んっ♡ だめッ♡

だからあっ♡」

「せやから、ちんこ蹴り上げろ言うたやん」

ずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッ♡♡

紫苑くんの腰の動きが速くなる。今の今まで相当な加減をされていたのだとやっとなづいて、私は何故か頭の中で「ごめんなさい」と呟いていた。でも、口から出るのはいやらしい喘ぎ声だけだ。

「あぁっ♡♡♡♡だめッ♡♡だめえッ♡♡」

聞いたこともない低い声で、紫苑くんが言う。

「あー出る。出るで、香乃ちゃん」

「やだやだやだッ♡♡あッ、ああッ♡♡」

「香乃ちゃん」

ばちゅッばちゅッ♡♡と快感を溜め込むように腰を激しく揺らす紫苑くんが、耳元で私の名前を呼んだ。

一瞬で過ぎった夕方の教室に、膾の中がきゅうくっくっ♡♡と絞られていく。

(なんでえっ♡ 気持ちいいの、止まってくれない……っ♡♡)

「くっくっ♡♡♡」

「っ……」

私の腰がビクビクっ♡と大きく揺れると、紫苑くんも少しだけ呻いて腰を震わせ、動きを止めた。

ナカに出されてしまった感覚は分からなかったけれど、しっかりと出されてしまったのだろう。はあ、はあ、と紫苑くんが声を荒くしながら私にキスをする。

事が終わったと思い込み、呆然とそれを受け入れた。すると、紫苑くんの腰が再び動き始める。とんっ♡とんっ♡と奥をノックするようないうリズムで、声が高く跳ね上がった。

「い、あッ♡　だ、めえッ♡　なんでえっ♡♡」

「ごめん。止まらん」

紫苑くんの精子のせいか、さっきよりも粘度のある水音がぬちやッ♡ぬちやッ♡と車内に響いている。

いったばかりで痙攣の余韻が残っている膣内は、再び動き始めたおちんぽをまたきゅう♡と締め始めた。怖くて、手に力が入った。拳を握り、快感に喘ぎながら紫苑くんを見上げる。

「ひあ、あッ♡　止まって、紫苑くんっ♡　んッ♡　お、お願いッ……♡」

「ははっ、香乃ちゃん、お祈りしとるみたいや」

「ッ♡」

「俺にちんぽ入れられてんのに、他の男のこと考えてんの？　いけずやなあ。傷つくわ」

軽い口調で言う紫苑くんは、固く握られた私の指を解いた。左手の薬指だけを選んで掴まれて、手を握ることができなくなる。

「祈ったらあかんよ」

痛いくらい掴まれているのに、パンツ♡パンツ♡と速くなる腰に与えられる快感の方がどうしても強かった。

膣の収縮が止まらない。徐々に徐々に間隔が小さくなって、やがて頂点に辿り着く。

「ひ、ん……ッ♡ ……ッ♡♡♡♡」

腰を捻って絶頂してしまうけれど、紫苑くんの腰は止まってくれなかった。私の絶頂を一拍だけ味わって、またとちゅ♡♡とちゅ♡♡とおちんぽを打ち付ける。

「あつ、あゝッ♡♡ だ、だめえッ♡ 動かないでえッ♡♡」

「さっきまでの処女やったのに、イクの上手やなあ香乃ちゃん。女の

才能あるわ、シスターやめ」

「やッ♡ あッ♡ んうっ、紫苑くん♡♡ やだあっ♡♡」

「操もなくなつてしもたしな。まあ、黙つとつたらバレへんことやけど。神様は薄情にもなーんも喋らんわけやし」

「ひうッ♡ あ、あッ、ぐぐぐッ♡♡」

「それでも、嘘つくのしんどなつたら俺んところおいで」

ぱちゅッ♡ぱちゅッ♡とピストンを続ける紫苑くんは、優しい声で優しく舌をねじ込んだ。嬌声が喉から溢れても、声として口から出せなくなる。余計に、快感が溜まっていく。

「いつでもおいで」

またスピードが速められて、おちんぼがぬちゅ♡ぬちゅ♡と膣内を掻き鳴らす。這い寄る絶頂はすぐそこにいた。

「あゝゝッ♡ だめっ♡ だめえッ♡♡」

「まんこきゅうきゅうやな、香乃ちゃん。俺もまた出そうや」

「だめっ♡ ナカだめえ♡♡ あ、ああ~~~~♡♡♡♡♡」

「一緒にイこ」

戻れない道に、連れて行かれているみたいだった。

ただただ与えられる快感で、私はその道を辿ることしかできない。

「あ、あ♡♡ イく♡♡ イく♡♡ イっちや、う♡♡ ……♡♡♡」

「あ♡♡ ~~~~~♡♡♡♡♡」

「~~~~~…っ」

私が達した瞬間に射精した紫苑くんは、大きく息を吐いた後も私におちんぼを押し付けた。

ぐっ♡ぐっ♡と精子を押し込みながら、紫苑くんはぼつりと言う。

「ごめんなあ、香乃ちゃん」

嵐のようなノイズが混じっても、きちんと聞こえた。



喪失感というんだろうか。神に捧げた貞操を奪われたのだから、それに近い気持ちであると思う。

でも、どうあっても神は助けてくれない。泣こうが叫ぼうが、私を守ってくれない。

（声も、身体も、そこにはない）

そんなことは、分かっていたはずなのに。

「香乃ちゃん」

助手席で黙りこくっていたら、高速道路をのんびり走る紫苑くんが

前を向いたまま私の手を握った。くつついた瞬間に体温を感じて、張り詰めた肩の力が少し抜ける。

神様から、私を奪った人がここにいる。

「また、デートしよな」

紫苑くんは、ここにいます。声も、身体も、ちゃんとある。

（この気持ちは、なんて表現したらいいんだろう）
街灯が流れていく。

いろんな車が、紫苑くんの車を追い越して行った。